古代に残る飯石郡西部の竪穴建物の検討

林　　健　亮

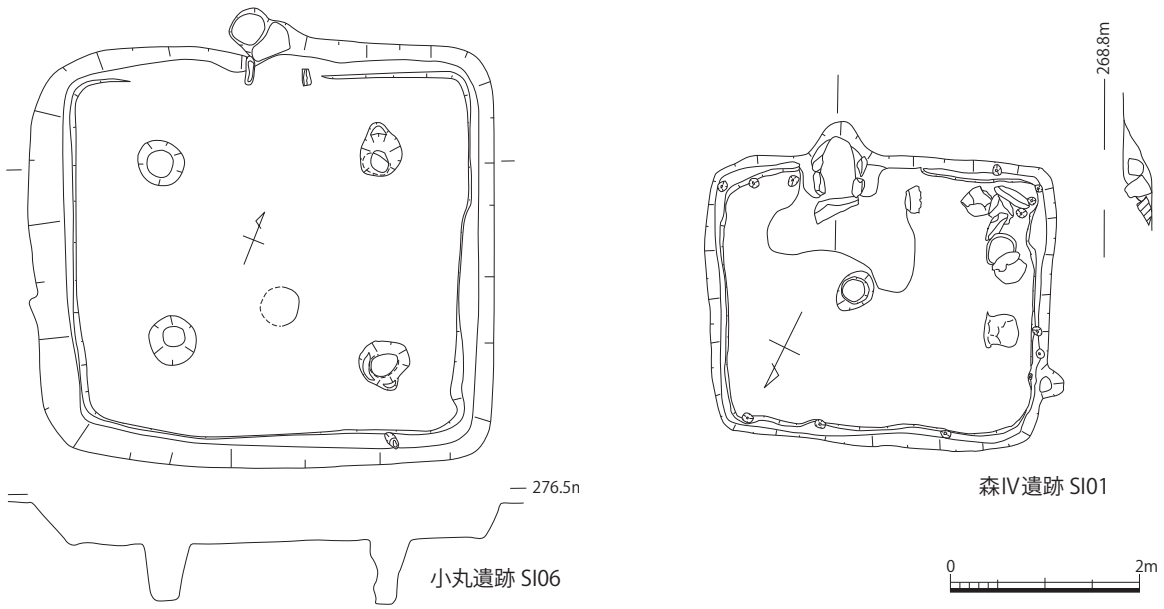
1．はじめに

以前、竪穴住居と呼ばれていた地面を掘りくぼめて作る建物遺構は近年では竪穴建物と呼ばれることが一般化しつつあり、工房など住居以外の機能を持つものも多く含まれることが明らかになってきている。こうした竪穴建物は古墳時代中期以前の集落ではよくみられるが、出雲地方のほとんどの地域では7世紀初頭を最後に消滅し、7世紀中葉以降は集落の全ての建物が掘立柱建物で構成されるようになることが知られている。ところが、出雲地方でも飯石郡西部に限って8世紀以降になっても竪穴建物が存続する(1)。

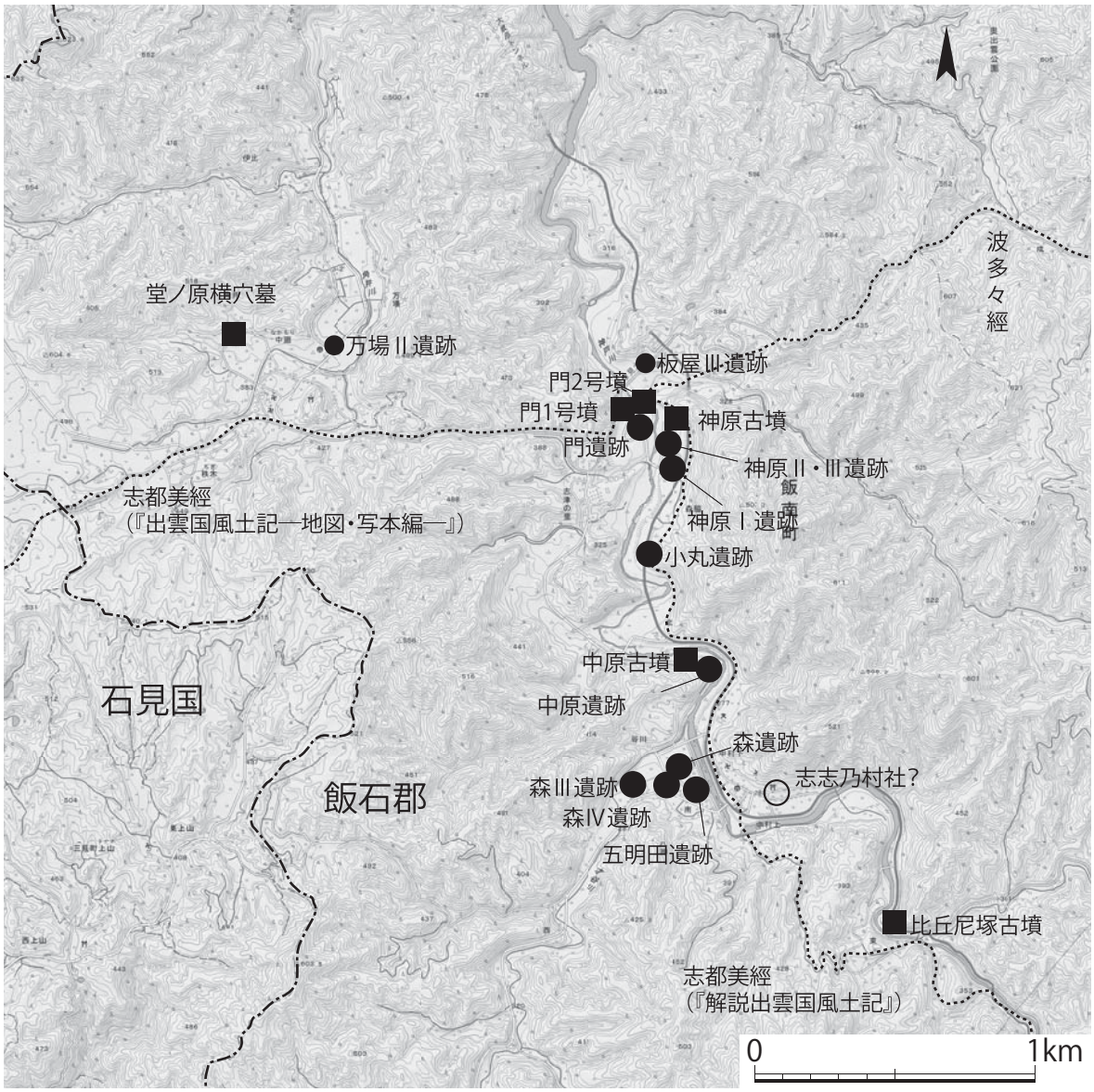
7世紀初頭以前の竪穴建物は遺構の中ほど近くに4本の太く深い柱穴を掘って、山側の壁の中央にカマドを設ける場合が多い。カマドが壁の中央に設置される理由は、柱位置を避けて調理スペースの自由度を確保するためと言われ、また4本の太い柱は長期間の使用に耐える丈夫な構造であることを示す。このような竪穴建物は資材の確保を含めそれなりの時間と労力を費やして建てられたことが想像される。一方、古代に入ると竪穴建物は全国的に小型化する傾向があり、カマドがない場合や遺構としての柱穴を残さない竪穴建物も増加する。遺構としての柱穴を認識できない竪穴建物と、自立する太い柱で屋根を支える竪穴建物を同列に扱うことを疑問視する意見(2)もあり、古代の竪穴建物は太い柱を使用せずに上屋を構築できる簡易な構造の割合が増えている可能性が高い。古代の竪穴建物には恒久的な住居の用途以外に、簡易な工事で構築できる建物として作業用や作業に伴う出先の住居として作られたものが多く含まれることが想定され、須恵器・瓦窯での工人集落や、官衙・寺院等の建設に伴う一時的な集落。手工業生産のための工房（大上2015）などが考えられる。

本稿ではこうした点を念頭に、出雲地方で例外的に7世紀中葉以降も竪穴建物が多く残る飯石郡西部地域(3)を検討する。この地域は三瓶山外輪山の東斜面を中心とする地域で、北流する神戸川の中・上流域に位置する。この地域では志津見ダムの建設とその関連事業等によって多くの遺跡が発掘調査された。

この地域では縄文〜弥生時代の集落も多く知られ、古くから人々が活動してきた地域であることがわかってい



第1図　広く深い4本柱の建物跡と柱穴を認識できない建物（小丸遺跡SI06と森Ⅳ遺跡SI01：1:80）



第２図　飯石郡西部の関係遺跡等地図（１：25,000）

る。ところが古墳時代に入ると遺跡数は激減し、古墳時代中期頃の集落遺跡はわずかに森Ⅲ遺跡（飯南町教委2009）や下山遺跡（島根県教育委2002）で竪穴建物が知られる程度となっている。

この地域の古墳には堂ノ原横穴墓、門１・２号墳、中原古墳、比丘尼塚古墳が知られている。角井の堂ノ原横穴墓からは須恵器が採取されており６世紀後葉～末頃と考えられている。堂ノ原横穴墓は万場Ⅱ遺跡に近い場所だが、万場Ⅱ遺跡は７世紀から始まる集落遺跡で、この近辺で６世紀代の集落の様子は判明していない。また、横穴墓も非常に少ない点が注意される。門１・２号墳については本稿で検討するが、６世紀～７世紀初頭の古墳だった可能性があり、やはり近隣に同時代の集落が確認できない。八神の中原古墳と比丘尼塚古墳はいずれも７世紀前葉の横穴式石室と考えられている。この地域で再び遺跡数が増加する時期に登場する古墳で、竪穴建物を中心とする集落遺跡と重なる。一方この時期は、出雲地方の多くの地域で竪穴建物が消滅していくタイミングとなっている。

表１　飯石郡西部の竪穴建物の増減

遺跡名	7c初頭	7c前葉	7c中～後葉	7c末～8c初	8c中～後葉
森遺跡		4	2	6	
森Ⅲ遺跡	3	7	5	2	3
森Ⅳ遺跡			1	1	1
小丸遺跡			5		
的場尻遺跡			1		
神原Ⅰ遺跡		1	1		
神原Ⅱ遺跡					6
神原Ⅲ遺跡		1		1	
板屋Ⅲ遺跡	2	2			3
門遺跡			7	3	3
万場Ⅱ遺跡			20	3	1

出雲平野の集落遺跡の増減についてはすでに池淵氏

の研究（池淵2019）などがある。それによれば6世紀代の遺跡が非常に少なく、6世紀末頃（大谷4期）から急増するとされており、自然増ではなく外部からの移住に伴う可能性が指摘されている。飯石郡西部地域の集落が急増する時期は出雲平野よりも一段階遅く、7世紀前葉（大谷5期）からとなるが現象としては同じものだろうか。

『出雲国風土記』に見える飯石郡は7郷19里がある。この内、竪穴建物が集中して見られる飯石郡西部は波多郷の西半にあたる（古代文化センター2023）。『出雲国風土記』飯石郡の通道記載には波多々經、須佐經、志都美經といわゆる権刻が記され、この地域の遺跡群は志都見經周辺に展開していたと考えられる。志都美經については以前は志津見から神戸川沿いに南下し、『出雲国風土記』の南西道に繋がって備後へ向かうルートなどが想定されていたが、近年は波多からまっすぐ西に向かい石見へ向かう説が示されている（古代文化センター2022）。いずれのルートだとしてもその実態は考古学的にはわからない。

志々地区で調査されている遺跡数や遺構からみる限り、この周辺にはそれなりの人口があったように思えるが、『出雲国風土記』では波多郷に関する記事はきわめて少ない。『出雲国風土記』飯石郡波多郷は「波多都美命、天降坐家在。故、云波多。」とあり、波多都美命に由来する地名とするが、波多都美命を祀ったとみられる社の記載はない。また、波多郷内の社についてもおそらく不在神祇官社の志志乃村社しか記されていない。志志乃村社は現在の志々乃村神社に続くと考えられ、古代の場所は判らないが、大字獅子霊亀山に志々乃神社旧社地が知られていると言う（古代文化センター2023）。現在の志々乃神社は飯南町八神の森遺跡群の対岸に鎮座している。なお、波多郷の中心地とみられる雲南市掛合町波多地区については発掘調査が少なくその実態はわからない。また『出雲国風土記』飯石郡の波多小川には「鐵有」と記され、砂鉄が採取されていた（古代文化センター2023）と考えられている。

2．飯石郡西部の竪穴建物

前述のとおり、飯石郡西部の集落遺跡の多くは出雲地方で竪穴建物が消滅していく時期から始まることから、自然発生した一般集落以外に政策的に配置された集落があったのではないかと言う疑いが浮かび、現にそうしたことを思わせる遺構が森Ⅲ遺跡（飯南町教委2009）でみられる。

森Ⅲ遺跡が所在する沖積地は東から北へ蛇行する神戸川に面した北向きの平野で、この周辺では比較的広い沖積地となっている。隣接して森遺跡や森Ⅳ遺跡などがあり、併せて森遺跡群と呼ばれる大規模な集落遺跡となっている。森遺跡群の北側の丘陵には中原古墳の横穴式石室が、南側の神戸川右岸には比丘尼塚古墳があるほか、遺跡の対岸東側には『出雲国風土記』記載の志志乃村社に比定される志々乃村神社が坐す。こうした立地からも森遺跡群はこの地域の中心的な集落と考えられ、遺跡群は7世紀前葉から始まり8世紀代まで続く。この遺跡群の中心である森Ⅲ遺跡は弥生時代に始まる集落遺跡で、この地域では珍しく古墳時代中期も継続して集落が営まれている。森遺跡群周辺がこの地域最大の平野であることから、伝統的な自然集落を中核とした集落であることはまちがいない。

森Ⅲ遺跡の遺構配置図（第3図）を見ると遺跡西側にSI39～45がきれいに並ぶ状況が目に入る。この場所は前代までの遺構が全く見られない場所で、遺構が密集する遺跡東側とは明らかに様相が異なる。これらの遺構から出土する須恵器類はいずれも大谷5期に含まれると思われ、7世紀前葉頃。並び方からＡグループ（SI40・41・43）とＢグループ（SI42・44・45）に分かれる可能性があり、SI39もＡグループに含まれるか。

SI40は3～6本柱の焼失住居。須恵器は大谷5期と思われるが報告では奈良時代とされる。5.15×5.8mで約30㎡の大型建物。ヤリガンナや石見産とみられる須恵器を出土する。須恵器坏のほか小型の土師器鉢があり、出土土器に食膳具の割合が高い。SI41は13.5㎡の建物で柱穴は確認できない。遺構の中ほどに焼土面があるが炉のような構造は不明。遺物は少なく須恵器3点のほか、鉄製紡錘車が含まれる。SI43は約20㎡の竪穴建物で、4本柱

第３図　森Ⅲ遺跡の遺構配置図（遺跡主要部付近　１：500）

の痕跡が残るがいずれも浅い。カマドはないが、遺構の南隅から多量の土師器甕・甑が出土している。また、曲刃鎌・刀子が出土した。SI39は約９㎡の小さな竪穴建物で柱穴は確認できない。遺物は小型の土師器杯１点と台石がある。極端に小さいSI39が倉、SI41を工房と考えることができるか。

これらの建物の先後関係はわからないが、屋根が接することから同時並存はしない。近接する遺構の間に切り合い関係がまったくないことから、どちらかの建物跡が明確に痕跡を残す状態で建てられていることがわかる。３棟とも20㎡前後でこの内２棟は焼失建物と報告される。SI42はやや不揃いの位置に４本柱を立てる18.5㎡の建物でカマドはない。須恵器坏のほか方頭鏃を出土する。柱穴以外に東側の角にピットが設けられるが用途はわか

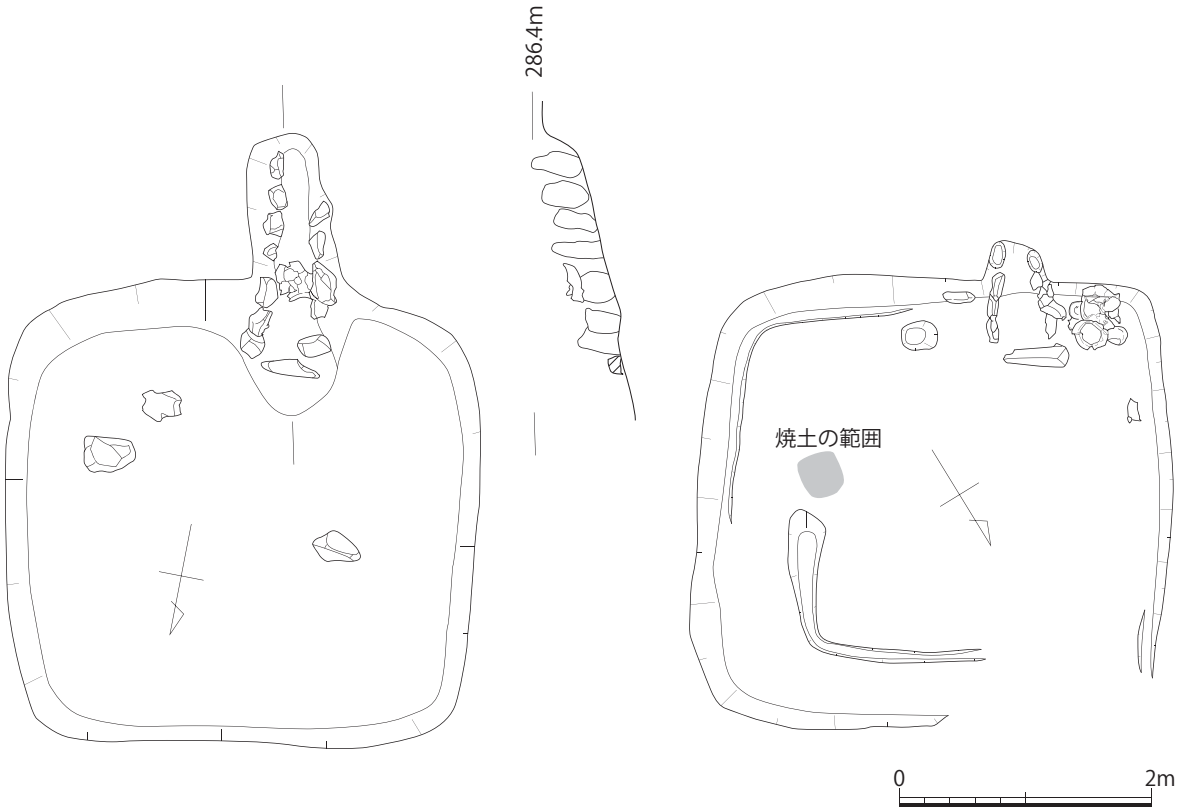
らない。SI44は２本柱の建物跡で20㎡。やや横長で、石組の作り付けカマドを持つ。カマドは東壁の北よりに設けられ中央ではなく柱の正面になっている。また、カマドの構築材と思われる石が周囲に散乱しており、カマドを破壊しているか。この遺構からは須恵器坏・高坏、土師器杯・鉢などの食膳具と煮炊具（土師器甕・甑）のほか、曲刃鎌や刀子などの金属製品を出土する。また、食膳具には石見産と思われる回転へら切りの須恵器坏を含む。SI45は細い２本柱の建物跡で19㎡。炭化材が多く出土し焼失建物と報告される。出土遺物には須恵器坏・土師器杯と言った食膳具のほか土師器甕・甑がある。

これらの建物群は計画的に造られたように見えるが、確実にカマドを持つのはＢグループのSI44のみ。Ａグループは食膳具を多く出土する居住用の建物（SI40）、煮炊具を多量に出土する建物（SI43）、工房や倉の可能性がある施設（SI39・41）と用途ごとに異なる建物がセットになっているように見えるが、いずれもカマドがみられない。SI41の床面に焼土面が広がっていることから炉があった可能性もあるが、この時期の飯石郡西部地域では移動式カマドや土製支脚は見られないことから、別に煮炊きのための施設があったか。一方、Ｂグループは全ての建物が約20㎡とほぼ同規模で規格的。ＡグループのSI43、ＢグループのSI44・45からは大量の土器が出土しており、集落の移動に伴って廃棄されたか。

その後、８世紀に入ると遺跡の中心は再び東側に移り前代まではなかった大型掘立柱建物が中心となる。森Ⅲ遺跡で見られる７世紀前葉の集落は伝統的な自然集落から少し離れて計画的に建てられ、さらに短期間で使用を終えた可能性があり、政策的・組織的な移住に関わる可能性が想像される。

３．竪穴建物の構造

飯石郡西部に展開する集落遺跡の竪穴建物には様々な形状のものが含まれる。国境を超えた石見地方の山間部では１m以上延びるカマドの煙道（長煙道）が知られており、飯石郡西部で一般的なカマドの背後に短い煙道が



第４図　長煙道の竪穴建物と短煙道の竪穴建物　森Ⅲ遺跡SI09（左）と門遺跡SI-12（右）（1:60）

表２　飯石郡西部の竪穴建物一覧

遺跡名	遺構名	時期	形状	規模	面積	柱穴	カマド
森遺跡	SI09	古墳時代	不整方形	5.3×		４？	石組作り付け
森Ⅲ遺跡	SI04	古墳時代	方形	3.48×3.18	11.07	不明	石組作り付け
森Ⅲ遺跡	SI18	古墳時代？	方形	4.20×4.10	17.22	３？	なし
森Ⅲ遺跡	SI29	古墳時代？	方形	4.30×4.20	18.06	不明	石組作り付け
森Ⅲ遺跡	SI39	古墳時代	隅丸方形	2.85×3.20	9.12	不明	なし
森Ⅲ遺跡	SI49	古墳時代	隅丸長方形	2.18		不明	不明
森Ⅲ遺跡	SI50	古墳時代	円形？	2.56		不明	不明
森Ⅳ遺跡	SI01	古墳時代	方形	3.30×2.80	9.24	１！	石組作り付け
森Ⅳ遺跡	SI02	古墳時代	隅丸方形			不明	不明
森Ⅳ遺跡	SI03	古墳時代	不整方形	2.20×2.20	4.84	不明	作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI09	古墳時代	隅丸長方形	3.42×3.60	12.31	4	なし
万場Ⅱ遺跡	SI11	古墳時代？	方形	3.20×3.62	11.58	2	作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI12	古墳時代？	長方形	2.50×3.00	7.50	2	なし
万場Ⅱ遺跡	SI15	古墳時代	方形	3.06×3.48	10.65	2	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI23	古墳時代？	長方形	1.88×2.32	4.36	不明	不明
万場Ⅱ遺跡	SI27	古墳時代	方形	3.34		２以上	不明
万場Ⅱ遺跡	SI29	古墳時代	隅丸方形	2.78×3.20	8.90	４？	石組作り付け？
万場Ⅱ遺跡	SI31	古墳時代	不整長方形	3.54×4.34	15.51	2	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI34	古墳時代	不整方形	4.62×4.54	20.97	２以上	作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI39	古墳時代	長方形	2.80×3.42	9.58	不明	移動式カマド
万場Ⅱ遺跡	SI40	古墳時代	隅丸長方形	2.54×3.04	7.72	２～４	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI41	古墳時代	不整方形	1.98×2.36	4.67	２？	なし
万場Ⅱ遺跡	SI42	古墳時代	不整方形	2.08×2.45	5.10	２以上	なし
神原Ⅱ遺跡2002	SI02	古墳時代？	楕円形	3～4m		なし	不明
神原Ⅱ遺跡2002	SI03	古墳時代？	方形か			１以上	不明
神原Ⅰ遺跡	SI03	古墳時代？	方形	2.9		なし	不明
神原Ⅲ遺跡	SI01	古墳時代	方形	3.1		不明	不明
神原Ⅲ遺跡	SI02	古墳時代	方形？	4		４？	不明
神原Ⅲ遺跡	SI05	古墳時代	方形	3.9		不明	不明
神原Ⅲ遺跡	SI06	古墳時代	隅丸方形	3		２以上	不明
小丸遺跡	SI06	７世紀前半	方形	4.5×5.0	22.50	4	石組作り付け
板屋Ⅲ遺跡	9号竪穴住居跡	大谷４期？	方形？			４？	作り付け
板屋Ⅲ遺跡	10号竪穴住居跡	大谷４期	方形	5.5×3.5以上		４？	作り付け
板屋Ⅲ遺跡	13号竪穴住居跡	大谷４期	方形	4.4×4.0以上		4	作り付け
森Ⅲ遺跡	SI17	大谷４期？	不整長方形	4.70×6.20	29.14	不明	なし
森Ⅲ遺跡	SI24	大谷４期？	方形	5.92×		４以上	不明
森Ⅲ遺跡	SI26	大谷４期	方形	4.74×4.58	21.71	4	石組作り付け
森遺跡	SI08	大谷５期	隅丸方形	4.7×4.8	22.56	4	作り付け
森遺跡	SI10	大谷５期	方形	4.5×4.5	20.25	4	石組作り付け
森遺跡	SI16	大谷５期	隅丸方形	5.6×5.6	31.36	４？	石組作り付け
森遺跡	SI21	大谷５期	隅丸方形	3.15×2.7	8.51	不明	石組作り付け
森Ⅲ遺跡	SI11	大谷５期？	方形	3.26×3.26	10.63	不明	作り付け
森Ⅲ遺跡	SI30	大谷５期	方形	4.00×3.60	14.40	２以上	不明
森Ⅲ遺跡	SI40	大谷５期	方形	5.15×5.80	29.87	３以上	なし
森Ⅲ遺跡	SI41	大谷５期	方形	3.64×3.70	13.47	不明	なし
森Ⅲ遺跡	SI42	大谷５期	方形	4.32×4.28	18.49	2 or 4	なし
森Ⅲ遺跡	SI43	大谷５期	方形	4.60×4.40	20.24	4	なし
森Ⅲ遺跡	SI44	大谷５期	方形	4.98×4.10	20.42	２？	石組作り付け
神原Ⅰ遺跡	SI01	大谷５期	長方形	4.1×		外に２	作り付け
神原Ⅲ遺跡	SI04	大谷５期	長方形	4.1×3.0	12.30	多	石組作り付け
板屋Ⅲ遺跡	6号竪穴住居跡	大谷５期	平行四辺形	6.0×5.2	31.20	多数	石組作り付け
板屋Ⅲ遺跡	7号竪穴住居跡	大谷５期	平行四辺形	5.0×4.5	22.50	4	作り付け？
森遺跡	SI11	大谷６a期	方形	3.8×2.8	10.64	２？	
森遺跡	SI15	大谷６a期	不整長方形	3.55×4.25	15.09	不明	作り付け
森Ⅲ遺跡	SI19	大谷６期	隅丸方形	3.50×3.20	11.20	不明	作り付け
森Ⅲ遺跡	SI21	大谷６b・c期	隅丸方形	2.42×2.56	6.20	不明	なし
森Ⅲ遺跡	SI27	大谷６b・c期	隅丸方形	3.10×3.32	10.29	不明	作り付け
森Ⅲ遺跡	SI45	大谷５～６a期	方形	4.00×4.74	18.96	2	なし
森Ⅲ遺跡	SI48	大谷６d期？	隅丸方形	2.56		不明	不明
森Ⅳ遺跡	SI08	大谷６b・c期	隅丸方形	3.34		不明	石組作り付け
門遺跡	SI02	大谷６期	方形	3.1		２以上	不明
門遺跡	SI26	大谷６b・c期	長方形	5.0×4.0	20.00	なし	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI08	大谷６b・c期？	不整長方形	3.50×3.84	13.44	２以上	作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI10	大谷６b・c期？	不整長方形	2.85×3.54	10.09	2	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI13	大谷６b・c期	隅丸方形	4.10×3.72	15.25	4	石組？作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI14	大谷６期？	長方形	2.78×3.56	9.90	2	作り付け？
万場Ⅱ遺跡	SI17	大谷６期？	長方形	2.50×3.28	8.20	２～４	石組作り付け？
万場Ⅱ遺跡	SI20	大谷６期？	方形	3.06×3.42	10.47	２以上	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI22	大谷６期？	長方形	1.65×2.42	3.99	不明	不明
万場Ⅱ遺跡	SI28	大谷６b・c期	長方形	4.60×5.20	23.92	4	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI33	大谷６b・c期	隅丸方形	4.10×4.84	18.37	4	作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI43	大谷６b・c期？	不整方形	2.70×2.54	6.86	２？	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI48	大谷６b・c期	隅丸方形	4		２以上	石組作り付け
神原Ⅰ遺跡	SI02	大谷６b・c期	隅丸長方形	3.6×3.2	11.52	外に２	石組作り付け
小丸遺跡	SI04	大谷６期	方形	4.2×4.3	18.06	２？	石組作り付け
小丸遺跡	SI05	大谷６b・c期	方形	4.4×5.5	24.20	2	石組作り付け×2
小丸遺跡	SI08	大谷６b・c期	不整方形	3.3×3.7	12.21	4	石組作り付け
小丸遺跡	SI09	大谷６b・c期	不明			不明	不明

特徴的な遺物	特徴	その他
長頸鏃		須恵器坏があるという。報告では7世紀前半
		報告では奈良時代、根拠不明
土師器ハソウ		5世紀の須恵器坏は破片
	土師器杯1点のみ	
土師器甕2点		報告では奈良時代
		報告では奈良時代
土師器甕のみ		報告では奈良時代
須恵器甕小片、他は土師器甕		報告では奈良時代とするが須恵器甕片
		報告では奈良時代
ミニチュア土器		報告では奈良時代
	土師器のみ出土	
	土師器のみ出土	報告では8世紀前半頃
	土師器のみ出土	
		報告では奈良時代
		報告では7世紀前半頃
砥石		報告では奈良時代
刀子		
土師器2点		
曲刃鎌		
鉄製品		
曲刃鎌、砥石、石製紡錘車（報告では土製）		
なし		
	壁に接して柱穴がある	
土師器甕2点		焼失建物？
5条の平行ヘラ書き線入り須恵器坏、土師器甕		
須恵器蓋、土師器甕、鋸歯文石製紡錘車		
糸切底の須恵器小片あり	壁に接して柱穴	
		国府第4形式の高台付杯を含む
土製勾玉		焼失家屋
大和からの搬入土器、小刀、砥石	土器が非常に多い	
曲刃鎌、	建て替えの可能性あり	
櫛？たも網？		
須恵器蓋内面にヘラ書き		
ヤリガンナ、石見産須恵器杯		報告では奈良時代。焼失建物
鉄製紡錘車		
鉄鏃		報告では奈良時代
曲刃鎌、刀子		報告では奈良時代
曲刃鎌、刀子		報告では奈良時代
須恵器・土師器		
	国府3形式の杯を含む	
暗文の土師器杯、須恵器坏・高坏、土師器甕		
須恵器坏、×印付き土師器杯		
須恵器直口壺		
刀子		
赤彩暗文土師器杯、刀子		
ヤリガンナ		報告では奈良時代
方頭鏃		報告では奈良時代
ハソウ		報告では奈良時代
土師器片、須恵器高杯		
須恵器、土師器、土製管玉、鉄滓、鍛造剥片		この建物で鍛冶は行っていない（報告）
金属器	国府第4形式の杯を含む	報告では奈良時代。焼失建物。
		報告では7世紀前半頃
		報告では7世紀前半頃
		報告では7～8世紀
鉄鏃？多量の土師器甕		報告では7世紀前半頃
		報告では7世紀前半頃
曲刃鎌、石製紡錘車（報告では土製）	椀形滓、多量の土師器甕	報告では7世紀中頃、焼失家屋
須恵器少ない。刀子、鉄鏃		
ヤリガンナ？		
須恵器・土師器		
須恵器・土師器甕、刀子、鉄針（11cm）		焼失建物
須恵器・土師器、穂摘鎌、釣り針？	カマドが2基！	焼失建物
土師器、鉄製品		焼失建物
須恵器・土師器		焼失建物

遺跡名	遺構名	時期	形状	規模	面積	柱穴	カマド
門遺跡	SI08	大谷６d期？	方形	4.8×4.0	19.20	なし	石組作り付け
門遺跡	SI15	大谷６d期	不整方形	4.3×3.8	16.34	なし	作り付け
門遺跡	SI20A	大谷６d期	長方形	4.2×3.7	15.54	なし	石組作り付け
門遺跡	SI20B		不整長方形	3.1×4.0	12.40	なし	石組作り付け
門遺跡	SI20C		長方形？	3.8		なし	不明
万場Ⅱ遺跡	SI02	大谷６d期	長方形	2.24×2.7	6.05	2	不明
万場Ⅱ遺跡	SI04	大谷６d期	隅丸方形	3.70×4.40	16.28	4	不明
万場Ⅱ遺跡	SI05	大谷６d期？	長方形	2.48×3.42	8.48	3～4	不明
万場Ⅱ遺跡	SI06	大谷６d期	方形	3.30×3.56	11.75	2以上	作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI07	大谷６d期	方形	3.50×4.10	14.35	2以上	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI16	大谷６d期	長方形	3.76×4.94	29.85	4	石組？作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI18	大谷６d期	隅丸方形	2.52.×2.87	7.23	2以上	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI21	大谷６d期	隅丸方形	3.58×3.94	14.11	2以上	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI26	大谷６d期	隅丸方形	3.10×3.38	10.48	4	石組作り付け
五明田遺跡	SI1	大谷６d期	隅丸方形	2.8m			
森Ⅲ遺跡	SI07	大谷６～７期？	隅丸長方形	3.20×2.52	8.06	不明	石組作り付け
神原Ⅲ遺跡	SI03	大谷７期	隅丸方形	3.8×3.5	13.30	4	石組作り付け
門遺跡	SI13	７～８世紀？	長方形	3.65×2.9	10.59	なし	作り付け
門遺跡	SI16	７～８世紀？	不整方形	4.0×4.2	16.80	なし	なし
門遺跡	SI17	７～８世紀？	方形	3.5×2.9	10.15	なし	作り付け？
門遺跡	SI35	７～８世紀？	長方形	5.1×4.2	21.42	なし	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI19	大谷６～８期	方形	3.80×4.38	16.64	4	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI24	国府第１型式？	不整方形	2.10×3.10	6.51	２？	作り付け
森遺跡	SI12	国府第２型式	長方形	3.4×2.9	9.86	不明	不明
森遺跡	SI14	国府第２型式	方形	3.1×2.8	8.68	不明	石組作り付け
森遺跡	SI17	国府第２型式	不整方形	2.9×2.65	7.69	不明	石組作り付け
森遺跡	SI18	国府第２型式	不整形	3×2.75	8.25	２？	石組作り付け
森遺跡	SI19	国府第２型式	隅丸長方形	3.5×2.45	8.58	不明	作り付け
森遺跡	SI20	国府第２型式	方形	2.4×2.15	5.16	不明	石組作り付け
森Ⅲ遺跡	SI02	国府第２型式	方形	3.76×		２～４？	不明
森Ⅳ遺跡	SI04	国府第２型式	方形	3.60×3.00	10.80	2	石組作り付け
門遺跡	SI06	国府第２型式	隅丸方形？	3.5		2以上	不明
門遺跡	SI12	国府第２型式	方形	3.8×3.6	13.68	なし	石組作り付け
門遺跡	SI39	国府第２型式	不明				石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI03	国府第２型式	隅丸長方形	2.20×3.00	6.60	不明	不明
森Ⅳ遺跡	SI05	国府第３形式	方形	3.54×3.00	10.62	2	石組作り付け
神原Ⅱ遺跡2000	SI01	国府第３形式？	方形	2.8×		不明	石組？
門遺跡	SI38	国府第３形式	長方形	3.2×4.0？	12.80	なし	石組作り付け
万場Ⅱ遺跡	SI32	国府第３～４型式？	隅丸方形	4.44×5.32	23.62	2以上	石組作り付け？
森Ⅲ遺跡	SI09	国府第４型式	方形	3.35×3.13	10.49	不明	石組作り付け
森Ⅲ遺跡	SI15・28	国府第４型式	不整方形	4.32×5.10	22.03	多数	なし
森Ⅲ遺跡	SI22	国府第４型式？	方形	3.60×4.40	15.84	不明	なし
板屋Ⅲ遺跡	４号住居跡	国府第４型式	隅丸方形	4.5×3.9	17.55	2	作り付け
板屋Ⅲ遺跡	５号住居跡	国府第４型式	加工段	1.3×6.0	7.80	2	
門遺跡	SI18	国府第４型式	方形	3.8×3.8	14.44	なし	焼土が残る
門遺跡	SI19	国府第４型式	方形	2.6×2.7	7.02	なし	石材が残る
神原Ⅱ遺跡2002	SI01	国府第４型式	長方形	3.0×3.4以上		なし	不明
神原Ⅱ遺跡２区	SI02	奈良～平安時代	方形	3.3×3.0以上		１以上	不明
神原Ⅱ遺跡Ⅴ区	SI01	奈良時代		2.6			
神原Ⅱ遺跡Ⅴ区	SI02	国府第４型式	隅丸方形	3		3	
神原Ⅱ遺跡Ⅴ区	SI03	国府第４型式	隅丸方形	3.8×3.8	14.44	4	
森Ⅲ遺跡	SI32	古代か？	方形	2.20×2.46	5.41	２？	なし
森Ⅲ遺跡	SI34	古代か？	方形	3.15×3.26	10.27	２？	なし
森Ⅲ遺跡	SI37	古代か？	隅丸方形	4.76×		不明	石組作り付け
森Ⅲ遺跡	SI46	古代か？	方形	2.06×2.02	4.16	不明	作り付け
森Ⅲ遺跡	SI51	古代か？	隅丸長方形	2.72		１以上	石組作り付け？
森Ⅳ遺跡	SI06	古代か？	不整方形	2.32×2.10	4.87	不明	
森Ⅳ遺跡	SI07	古代か？	長方形	2.94×4.10	12.05	2以上	不明
万場Ⅱ遺跡	SI30	古代か？	隅丸方形			２？	不明
万場Ⅱ遺跡	SI36	不明	不整方形	3.00×3.26	9.78	４？	不明
万場Ⅱ遺跡	SI44	古代か？	不整長方形	1.96×2.74	5.37	２？	なし
万場Ⅱ遺跡	SI45	古代か？	不整長方形	1.82×2.16	3.93	2	なし
万場Ⅱ遺跡	SI46	古代か？	長方形	3.44×4.15	14.28	2	なし
万場Ⅱ遺跡	SI47	古代か？				１以上	不明
万場Ⅱ遺跡	SI49	古代か？	隅丸方形				
万場Ⅱ遺跡	SI50	古代か？	隅丸長方形	2.00×2.60	5.20	2	作り付け？
万場Ⅱ遺跡	SI51	古代か？					
森遺跡	SI13	古代か？	長方形	2.7×2.3	6.21	不明	石組作り付け
森Ⅲ遺跡	SI14	古代か？	隅丸長方形	2.58×3.23	8.57	2	なし
森Ⅲ遺跡	SI23	古代か？	不整長方形	3.20×3.04	9.73	不明	なし
門遺跡	SI05	奈良時代	隅丸長方形	3.2		2以上	不明
門遺跡	SI11	８世紀代か？	方形	3.6×3.3	11.88	4	なし
万場Ⅱ遺跡	SI01	不明	方形	4.12×4.42	18.21	多	不明
万場Ⅱ遺跡	SI25	古代	方形	2.82×3.30	9.31	４？	作り付け？
万場Ⅱ遺跡	SI37	古代か？	方形	2.24×2.33	5.22	2	石組作り付け？
万場Ⅱ遺跡	SI38	古代か？	不整方形	2.10×2.64	5.54	２？	石組作り付け
板屋Ⅲ遺跡	１号竪穴住居跡	古代か？	方形	2.5		2以上	不明
門遺跡	SI03	平安か？	長方形	3.9×2.8	10.92	なし	長煙道作り付け
門遺跡	SI07	中世か？	長方形	2.2×3.6	7.92	４～８	石組作り付け？

特徴的な遺物	特徴	その他
須恵器、土師器甕、手づくね土器、曲刃鎌		
須恵器坏・土師器甕、鉄塊、鉄滓、鍛造剥片	金床石？	報告ではこの建物内で鍛冶が行われた訳ではないとする
須恵器坏・蓋・鉢・高坏・甕、土師器甕、鉄鏃、鉄鎌、縫い針、鍛冶関係遺物		３棟が重なるが切り合い関係は不明
	SI20Bで鍛冶が行われた？	３棟の内最新か
回転へら切りの高台付杯	柱穴が短軸に２本	報告では８世紀前半。焼失建物
砥石、耳環		報告では８世紀ごろ。焼失建物
鉄鏃	柱穴は短軸に２本か？	
鉄鏃		報告では８世紀前半
刀子・鉄鏃・穂摘鎌他金属器、鍛造剥片	鍛冶遺構？	報告では７世紀前半
鉄鏃・砥石		報告では７世紀前半頃。焼失建物
鉄製品、砥石		報告では７世紀中頃
		報告では７世紀中頃
鉄鏃？		
須恵器蓋		
曲刃鎌２点、穂摘鎌、砥石		
鉄鏃・曲刃鎌		
土師器杯・甕、製塩土器、棒状鉄製品		
土師器甕		
炉壁、鉄塊		時期を確定する遺物なし。報告ではSI13から推定
須恵器甕、土師器甕・甑、砥石、鑷、縫い針		鍛冶関係遺物が出土するが建物廃棄後の流入とする
曲刃鎌、多量の土師器甕		報告では７世紀中頃～奈良時代
刀子？	須恵器なし	報告では７世紀頃
須恵器高台付杯の高台内側に漆	SI13の製塩土器と接合資料	
赤彩暗文の土師器杯		
赤彩の土師器杯、刀子？、砥石		
赤彩の土師器杯、砥石		古墳時代の高坏あり
鉄鏃		
針・リベット形の鉄器		
鉄片、鍛冶滓		金属製品出土
柳葉鏃・鉄鏃、曲刃鎌	壁に接して２本柱	
須恵器坏・蓋、土師器甕・甑、鉄鏃		
須恵器、土師器、製塩土器、台石、鉄施品		
須恵器蓋（転用硯か）		カマド付近のみ検出
曲刃鎌、鍛冶滓？	壁に接して２本柱	
曲刃鎌３点、鉄製紡錘車、刀子、鉄鏃？		へら切り（石見産か？）、静止糸切の須恵器を含む
須恵器坏・蓋・壺・甕、土師器甕、鉄鎌		
遺物は小片が少しだけ		
方頭鏃	煙道が長い	
	壁に接して柱穴	２棟が重なる。大谷５～６期の遺物を含む
		３棟と複雑に切りあうため、遺物は？
板状鉄製品		へら切り、静止糸切の須恵器、土師器甕
須恵器坏		
須恵器坏・高台付皿		
須恵器坏・甕、暗文の土師器皿		
須恵器坏・土師器甕、鉄鏃		
帯金具締具		SI02・03との関係から国府第4型式か
須恵器坏（特殊な形状を含む）・皿、土師器甕		焼土が広がる
須恵器坏・蓋・皿、土師器甕、曲刃鎌	主柱穴４と報告されるが、多数	壁中央に内傾した柱穴
	柱穴は建物外側！	報告では奈良時代
	土師器片のみ	報告では奈良時代
	遺物は土師器甕。	SI22などと複雑に切りあう。報告では奈良時代
	土師器片のみ	報告では奈良時代。焼失建物
ヤリガンナ、曲刃鎌、刀子	土師器甕は古墳か？	報告では奈良とするが、須恵器は小片。
土師器片のみ		報告では奈良時代
土師器小片		報告では奈良時代
	土師器片のみ	報告では奈良時代
遺物なし	４本柱建て替えで８穴か？	報告で８世紀頃
土師器片		報告で８世紀頃
土師器片		報告では奈良時代
土師器片		報告で８世紀頃
	遺物なし	報告では奈良時代
土師器片		報告で８世紀頃。焼失家屋
土師器片		報告で８世紀頃
		報告では７世紀末ごろ
製塩土器		報告では奈良時代
暗文の土師器杯、須恵器高台付杯（へら）	壁に接して柱穴	奈良時代？須恵器の時期検討
	土師器片少量	報告では奈良時代
須恵器坏		
土師器杯・甕、製塩土器、棒状鉄製品	4穴あるが不整形でいびつ	
鉄鎌		報告では奈良時代
須恵器ヘラ切り、赤彩土師器、鉄鏃	特徴的な須恵器高台付杯	報告では８世紀頃
土師器甕２点		報告では７世紀頃
土師器鉢１点		
遺物なし		１号掘立柱建物と切り合う
土師器甕、束ねた鉄製品		土師器甕のため不明
	長方形	青磁片出土。15世紀と報告

付くもの（短煙道）と区別されている[5]が、煙道の長短によってカマドの機能や使用方法が大きく変わることは考えにくいので、屋根の形状が異なるのであろう。長煙道の竪穴建物は竪穴の上端から煙道の煙出しまでの間が屋根だったと考えれば、竪穴の外側に垂木を掛けて分厚い屋根を支える構造が想像される。一方、短煙道の場合は壁のすぐ外に煙出しが付くため、壁体から壁が立ち上がりその上に屋根をかける構造が塑像される。飯石郡西部では短煙道のカマドが一般的だが、森Ⅲ遺跡SI09は1.2mの長い煙道を備え煙道の内部にも石を立てる半地下構造の煙道が明らかとなっている。この遺構は柱穴を確認できない。森Ⅲ遺跡SI09からは回転糸切底の須恵器杯が出土しており８世紀後半代（出雲国府跡第４型式）か。また、板屋Ⅲ遺跡（島根県教委1998）４号竪穴建物の煙道も90㎝以上の長さがある。この遺構からは８世紀後半代の須恵器高台付皿のほか鉄片が出土している。この遺構には浅い柱穴２穴がある。

変わった遺構では万場Ⅱ遺跡（飯南町教委2007）のSI28がある。隅丸方形の竪穴建物で他の遺構と複雑に切り合っているが対面して２基のカマドが検出され、南側のカマドが約1.2mの長煙道となっている。この遺構は北に傾斜する斜面に立地していることから、斜面下方側にあたる北側のカマドも長煙道が削平されたものかもしれない。万場Ⅱ遺跡SI28は４本のしっかりした柱穴があり、恒久的な建物として作られたとみられる。この遺構からは20個体以上の土師器甕が出土しており、カマドが２基あることからも煮炊きを行うための専用施設が想像されるが、多量に土器が出土していることから、集落の放棄に関わるものか。出土した須恵器杯・高杯は７世紀中頃（大谷６期頃？）か。

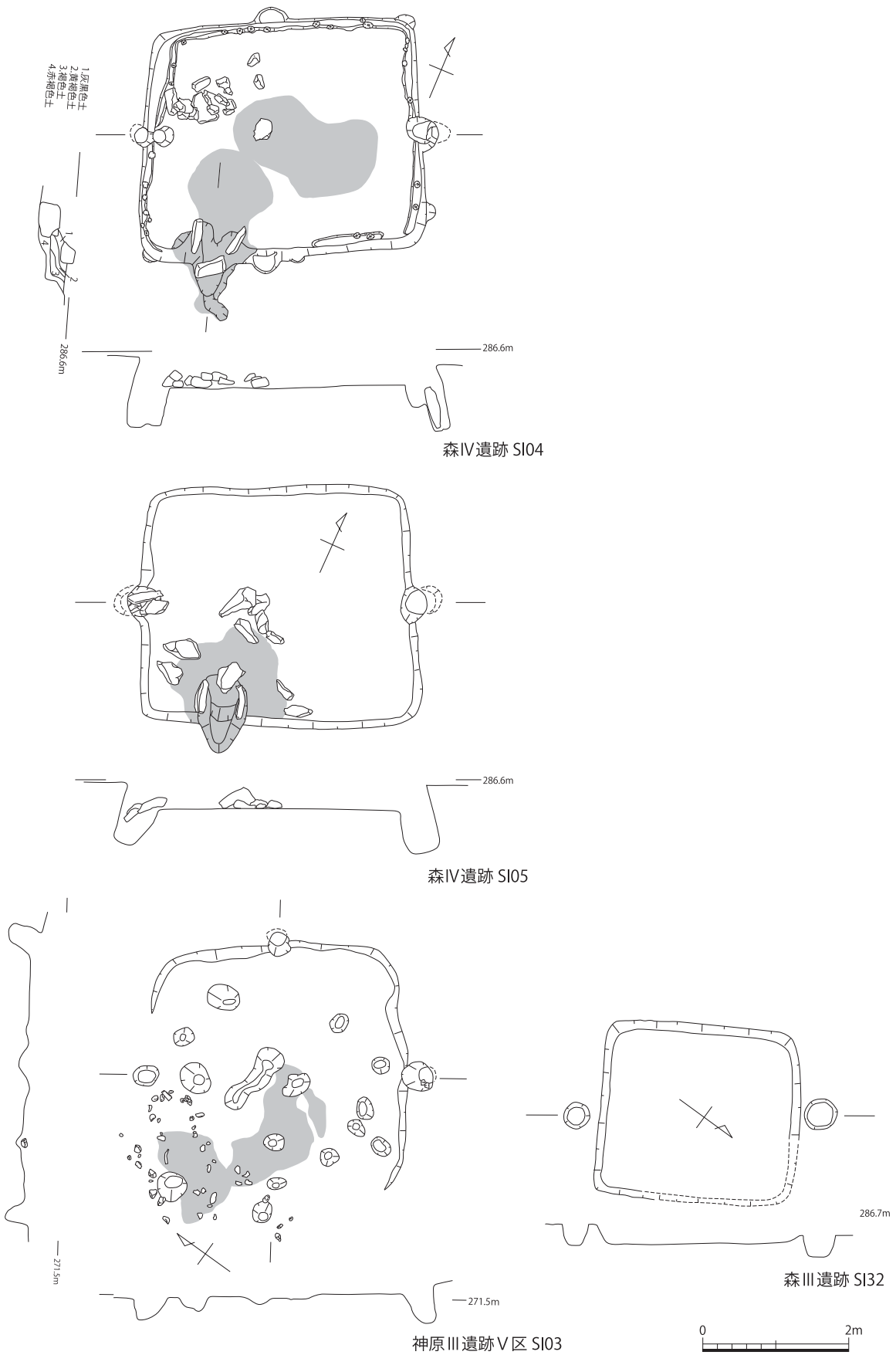
飯石郡西部の竪穴建物には一定数の２本柱建物がみられる。遺構の内側に２穴の柱穴を持つものについては、２本の柱間に梁を渡して屋根を掛ける建物と思われ、４本柱の建物と本質的な違いはないとみられるが、森Ⅳ遺跡ではそれとは明らかに違う構造の建物が存在する。

森Ⅳ遺跡（飯南町教委2009）SI04は東西の壁の中央に内傾した主柱穴を持つ。２本の柱が内傾することから棟が極端に短いと見られる。この建物では南辺の西よりに作り付けカマドを備え中央には置いていない。また、SI05も壁に接して内傾する柱穴がみられるが、４辺の全てに柱穴が備わる。対角線でないのでテント形にはならず、屋根の形状はわからない。いずれも柱穴は深く屋根が高い建物か。これらの建物は鎌や鉄鏃を出土し、出雲国府跡第２～３形式の須恵器坏がみられる。同様の構造のものは神原Ⅱ遺跡Ⅴ区（島根県教委2003b）SI03があり出雲国府跡第４型式の須恵器が出土する。森Ⅲ遺跡SI32は竪穴の外側に直立する２本の柱穴を設ける。こうした柱配置であれば切妻形の屋根を支える構造が推定され、片側の妻を入り口とした構造が考えられる。柱穴は深くしっかりしているが、断面三角形の単純な簡易な構造の建物だったと思われる。SI32からは複数の土師器甕と金属製品が出土しており報告では奈良時代とされる。これらの２本柱の建物は８世紀代に限って使用されており金属器が出土すると言う共通点がある。この点については次節で検討する。

飯石郡西部では様々な形状の竪穴建物が存在し、特殊な形状の建物は時期的なまとまりもあるか。飯石郡西部を除く出雲地方では、この時代は掘立柱建物だけで集落が構成されると言われるが、実際には柱配置の判らないいわゆる加工段が付属する場合があり、遺構としての柱穴を残さない竪穴建物と同様に簡易な構造の建物があった可能性が高い。

４．鍛冶が行われた竪穴建物

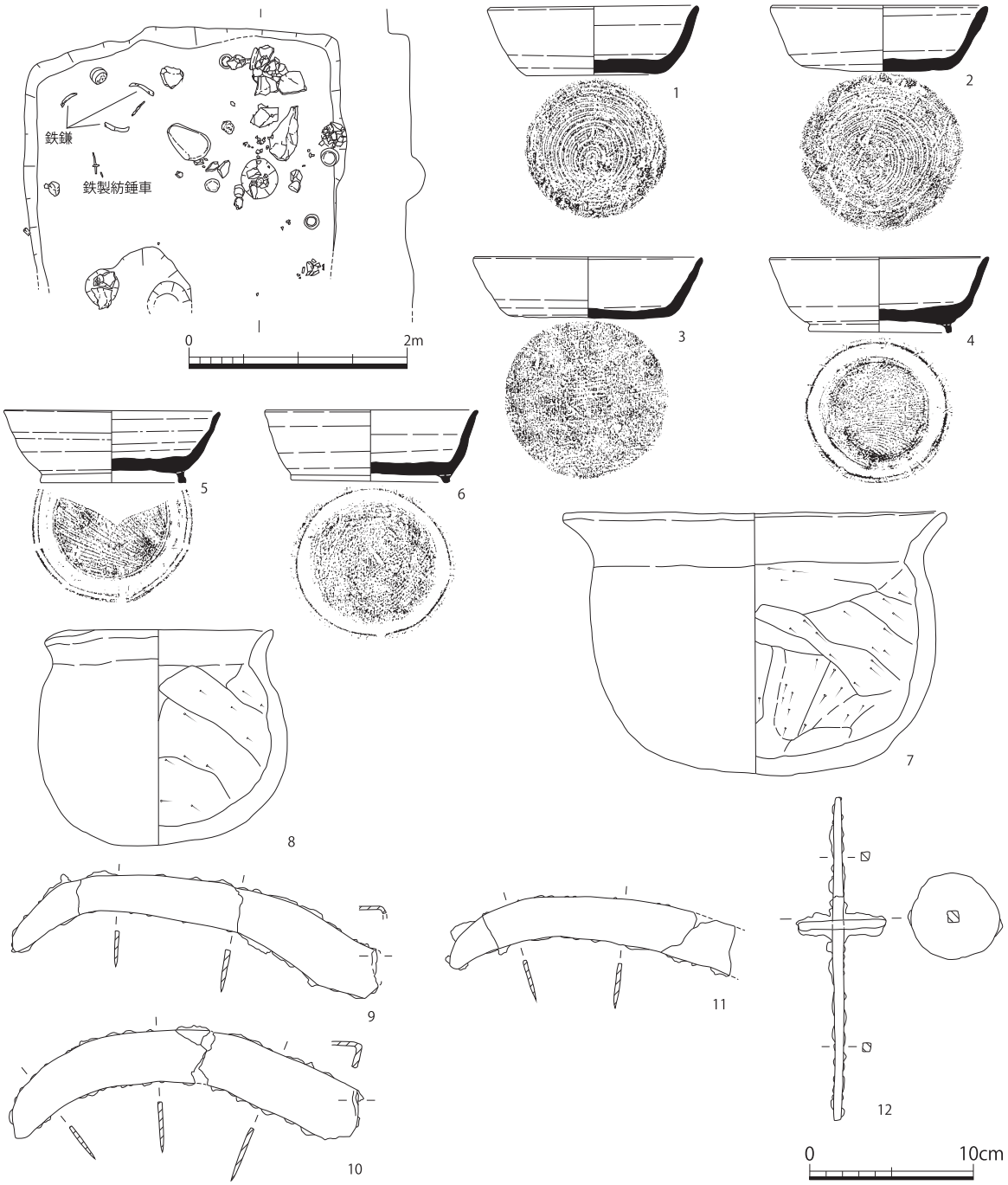
門遺跡（島根県教委1996）を始め、飯石郡西部の竪穴建物では鍛冶関係の遺物が出土している。門遺跡SI-15・20・26・35では鍛造剥片の出土が報告されているが、SI-26の鍛冶関係遺物については流入と報告されており、遺構に直接伴うものではないとされている。ただ、これらの遺構は時期の判らないSI-35を除き、いずれも大谷６期のもので遺構に伴なわないとしても、この時期に鍛冶が行われていたことは確実であろう。特にSI-15では



第５図　特殊な構造の竪穴建物（森Ⅳ遺跡SI04・05、神原Ⅱ遺跡Ⅴ区SI03、森Ⅲ遺跡SI32、S=1:40)

金床石とみられる被熱した石が出土している。これらの竪穴建物は、やや横長の方形を呈しカマドを伴うが柱穴の確認できない遺構。また、万場Ⅱ遺跡SI07でも鍛造剥片が検出されているほか、SI28からは椀形滓が出土している。これらも大谷６期であることから、７世紀中頃～後葉の一時期に鍛冶が行われており、組織的だった可能性を示唆する。なお、万場Ⅱ遺跡のSI07・28はしっかりした柱穴を伴う竪穴建物だが、いずれも大量の土師器煮炊具が出土しており、移動に伴って廃棄された痕跡か。

一方、森Ⅲ遺跡SI02、森Ⅳ遺跡SI05からも鍛冶滓が出土している。いずれも遺構の中ほどに焼土面がある。森Ⅳ遺跡SI05は前述のとおり、壁に接して内傾する２本柱を立てる特徴的な建物。同様の構造のSI04が約15m南にあり、この遺構も鉄製品を出土し、遺構の中央が被熱する。森Ⅲ遺跡SI02、森Ⅳ遺跡SI04・05は８世紀中頃（出雲国府跡第２～３形式）。この特殊な２本柱の建物は８世紀代の鍛冶を行うための施設か。



第６図　鉄製紡錘車を出土した竪穴建物の遺物（神原Ⅱ遺跡１区SI01：S=1:60、SI01 出土遺物：S＝1:3）

鍛冶が行われた竪穴状の遺構は鹿の子Ｃ遺跡（茨城県1983）を始め各地で知られているが、近隣では坂長第６遺跡（鳥取県2009）SS08などがある。出雲国府跡樋ノ口地区（松江市教委1975）の竪穴状遺構について、古くから鍛冶工房とする説があるが、この遺構の鍛冶関連遺物は少量の炭と羽口しかないことから県報告（島根県教委2012）では否定的。一方、寺田Ⅰ遺跡（雲南市教委2007）や鉄穴内遺跡（島根県教委2009）では古代の鍛冶工房が調査され、加工段で鍛冶が行われたことが確認されている。寺田Ⅰ遺跡の鍛冶工房については、雲南市教育委員会によって復元模型が製作されている[6]。

神原Ⅱ遺跡１区（島根県教委2002）の調査区北東側で検出したSI01（第６図左上）は柱穴を確認できない竪穴建物。一辺2.9m程の非常に小さな遺構で、カマドが確認できないが、遺構の中ほどやや西寄りに黒色土が浅い入った土坑がある。出土遺物には刀子・鉄鏃のほか３点の鉄鎌と鉄製紡錘車がある。土器類には須恵器坏・高台付杯のほか土師器があるが、器高のない鉢形の甕が目立つ。この建物の浅い土坑には黒色土が入っており炉だったと思われるが、土製支脚などがないことから煮炊き以外の用途が考えられる。この遺構からは鍛造剥片は確認されておらず、鉄製紡錘車が出土していることから糸を生産したのではないだろうか。また、この遺構からは同形の鉄鎌が３点まとまって出土している点も注意され、鎌を用いる作業が行われていたらしい。この遺構から出土した須恵器坏は出雲国府跡第３型式頃と思われ８世紀中頃か。

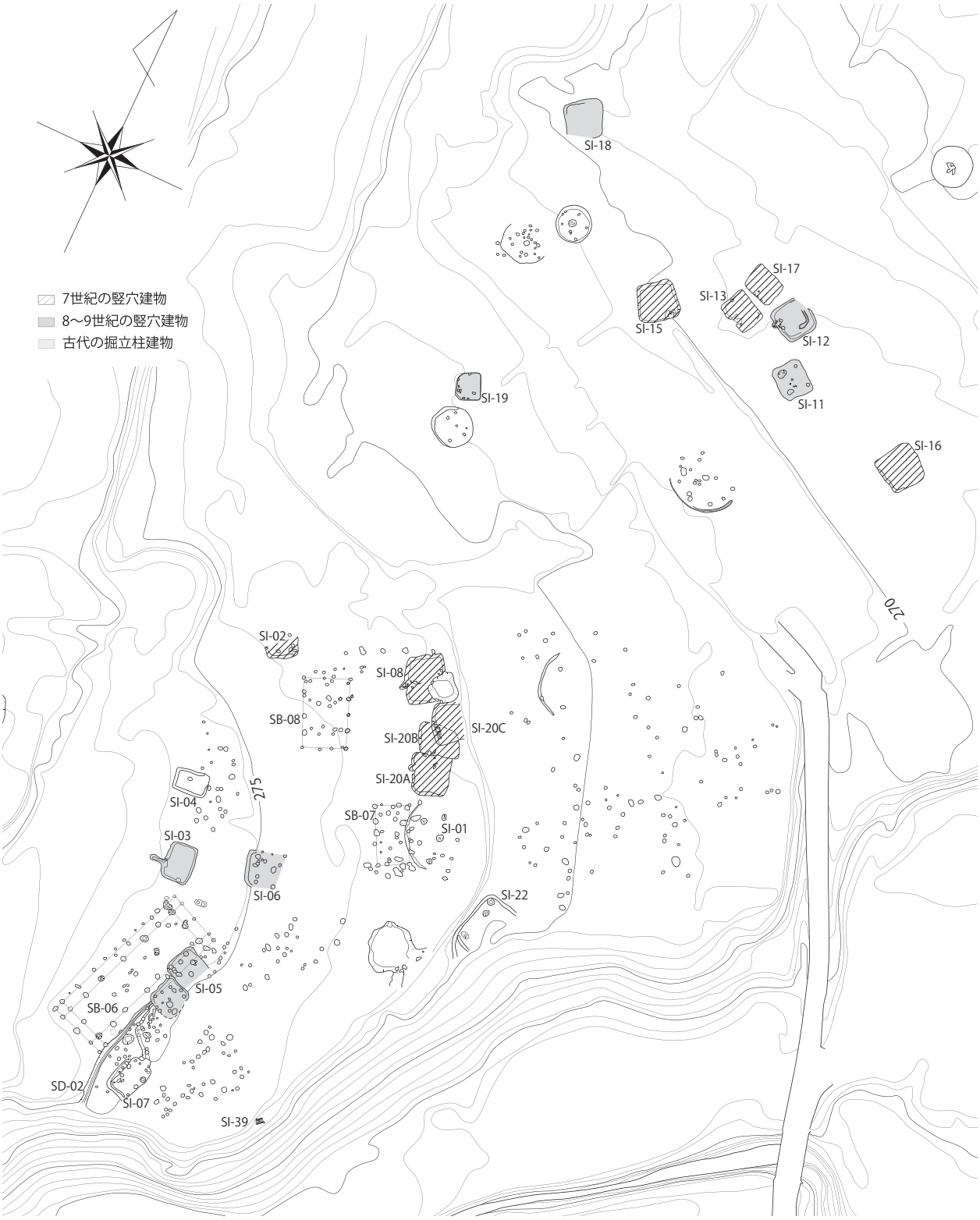
５．大量の土器を廃棄する遺跡

神原Ⅱ遺跡Ⅴ区からは３棟の竪穴建物が検出されているが、このうちSI03の周囲からは多量の遺物が出土している。この調査地で最も注目されるのは、締具を出土したSI01であろう。SI01は調査区南端で検出された竪穴建物と報告される遺構だがいわゆる加工段か。帯金具の締具が出土しており、遺跡に役人が居住した可能性がある。出土場所が調査区南東端に近いことから、南東側に遺跡が広がっていた可能性もあるが、調査された範囲内では掘立柱建物は検出されていない。締具がSI01に伴うものであれば、竪穴建物や小規模な加工段に役人が住んだか。SI01は他に遺物がなく、時期の確定は困難。SI02は調査区中ほどで検出した竪穴建物。遺構の中からは多数のピットを検出しているが、主柱穴は明確でない。遺構全体に焼土が広がるがカマドはない。出雲国府跡第４型式頃の須恵器坏・皿、土師器甕が出土している。SI03は調査区西端で検出した竪穴建物。前述のとおり一般的な竪穴建物と違う形状の屋根だったはずだが、どのような形状かはわからない。鉄鎌や砥石のほか、 20点以上の須恵器食膳具（出雲国府跡第３型式）、20点以上の土師器甕が出土している。また、この遺構の周囲から石見産須恵器を含む石見９Ａ期（８世紀中ごろ）の須恵器坏・皿・高台付杯、土師器甕が出土している。移動に伴う廃棄か。

この他にも飯石郡西部の竪穴建物には大量の土器を出土する遺構がある。けっして大きいとは言えない竪穴建物に須恵器・土師器の食膳具のほか、10個体以上の土師器煮炊具を残すものが見られる（森遺跡SI10・SI16、森Ⅲ遺跡SI43、小丸遺跡SI05、万場Ⅱ遺跡SI12・SI19・SI20・SI28・SI42など）。こうした遺構出土の土器は土師器甕が中心であることから煮炊の建物施設とみることも可能だが、大量の土器を廃棄すれば翌日からの煮炊も困難であることから、移動に伴う廃棄だった可能性はないだろうか。これらの土器の大量廃棄の時期は７世紀前半～中頃（大谷５～６期）とみられる。万場Ⅱ遺跡SI42は時期の推定が可能な土器が含まれていないが、鋸歯文を施す石製紡錘車が出土していることから同時期であろう。

６．志都美径と権剗

神戸川左岸に位置する門遺跡は大型の掘立柱建物が複数検出され、山間部にある古代の一般集落とは考えにくい規模の建物が含まれることから、『出雲国風土記』記載の権剗と推定する説がある（島根県教委1994）。掘立柱

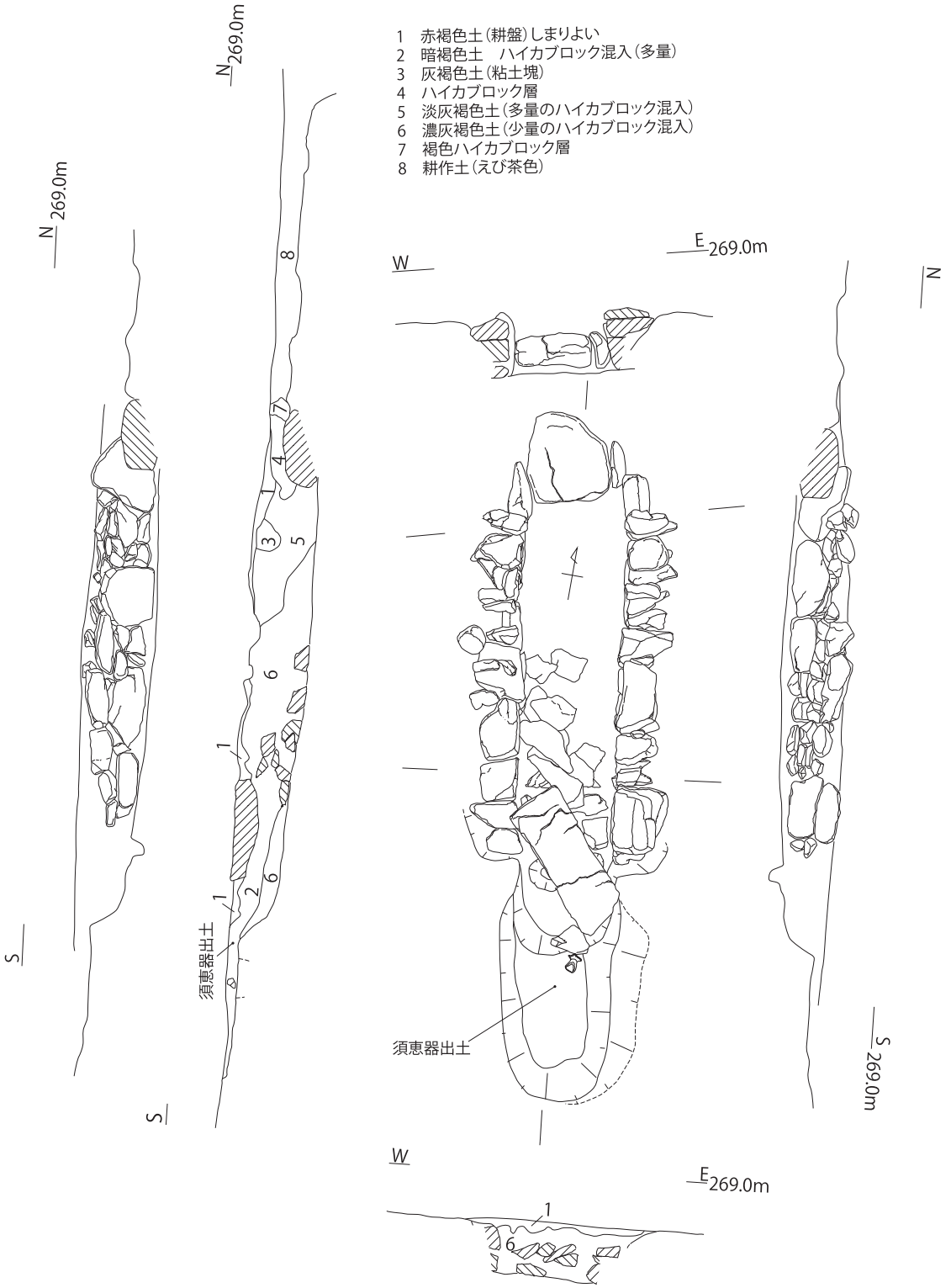


第７図　門遺跡遺構配置図（S＝1：600）

建物以外にも奈良時代まで続く竪穴建物が多数あることが知られている（第６図）。

門遺跡は神戸川に面した北向きの緩斜面に立地する遺跡で、建物跡を始め多数の遺構が遺跡全体に広がるが、遺跡中ほどには古代の遺構がない部分がある。調査区中程にあたる標高269m付近の北側には古代の建物跡がなく石室２基がある。これらの石室は前庭側壁に石を使用しないもので、北部九州で５世紀後半から６世紀にかけて盛行する竪穴系横口式石室の系譜を引く石室と考えられる[7]。

1号墳の石室[8]は狭長な長方形を呈し、地山を掘り込んで奥行3.3m、幅0.9mの石室を構築する。上面は削平され、高さは68㎝しか残っていない。奥壁は転倒しているが一枚石を置く。側壁は基底部に大型石を置き、その上の板石を小口積みにして2段以上が積まれる。天井石はわからないが玄門に相当する位置に長さ約130㎝、幅50㎝、厚さ約20㎝の石が落ちており天井石の一枚か。その石の周囲には拳大から人頭大の石が散乱しており、破損した天井石や側壁もしくは閉塞石の一部であろう。玄門部の床面には溝状のくぼみがあり、両側が膨らんだ鉄



第８図　門１号墳（1:60）

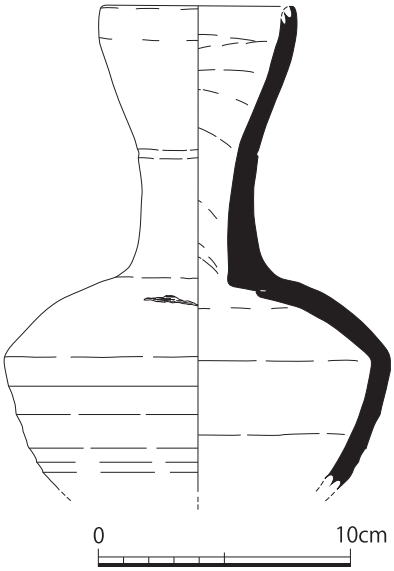
アレイ形に見えることから、報告では観音開きの扉が付くという踏み込んだ推定をされている。玄室内からは遺物は出土しなかった。

報告書でこの古墳を７世紀後半とする根拠として示される長頸瓶は、出土状況図に頸部から口縁部の破片の出土位置が描かれていた。この土器には103と言う数字が記されており、側壁の石材等に落とされていた数字から標高269.5mからのマイナスレベルであると判断される。これを土層図に当てはめると第２層から出土した可能性が高く、床面からは浮いた状態での出土だったことがわかる。また、石室内に散乱する石材よりも高い位置か

ら出土したことが確実で、少なくともこの古墳の初葬に伴うものではない。第２層はハイカ（三瓶山の火山灰に由来する堅くしまった白色粘土の地元での呼称）ブロックが混じる暗褐色土なので後世の流入土と思われ、この長頸瓶は門１号墳に伴うものとは限らない。

門２号墳も１号墳と同様の石室で、東半が大きく破壊されており東壁は全くわからない。石室の全長は3.2mで、１号墳よりわずかに小さい。奥壁は一枚石で幅70cm、高さ85cm。西壁は立面図がないため判断しがたいが、断面にかかる部分から高さ40cm、幅40～50㎝ほどの基底石を並べ、その上に板石を小口積みに積んでいると思われる。閉塞等は全くわからない。墓道は幅70㎝、長さ90㎝ほどが残っており南東側から階段状に降りてくると思われる。なお、墓道の両側に直径20～30㎝程の柱穴状のピットが図示されるが、深さは不明で、この古墳に伴うかどうかもわからない。２号墳からは遺物は出土しなかった。

２基の石室はわずか５ｍしか離れていないが主軸方向は異なる。墳丘についてはまったくわからないが、距離が近いことから一つの墳丘を共有したか。



第９図　門１号墳出土長頸瓶（１：３）

竪穴系横口式石室は北九州では５世紀後半から６世紀前半に盛行する石室で、伯耆の竪穴系横口石室墳は５世紀末～６世紀中頃（近藤1987、角田1999他）と考えられている。門１・２号墳が北九州の影響によるものか、伯耆から伝わったものかを判断する材料を持ち得ないが、いずれにしろ７世紀後半代の古墳ではない可能性が高い。よって、門遺跡の古代の集落が広がる以前から存在した古墳であろう。

掘立柱建物は直接伴う遺物が少ないために時期を決めがたいが、第９図には７世紀代と８世紀代と思われる遺構を区別して示した。斜線の遺構は概ね７世紀代と考えられる竪穴建物。この内SI-15・20b・26・35からは鍛造剥片が検出されており、SI-15では被熱した板石が、SI-20bからは鉄鏃、鉄鎌、縫い針、不明鉄製品が出土し、SI-26からは鉄塊や土玉も出土した。SI-35からは鑷や鉄鏃などの鉄製品を始め砥石が出土しているが、鉄滓・鉄塊・炉壁・鍛造剥片は建物廃棄後の流入と報告されている。この他SI-08からは曲刃鎌の他、鉄塊が出土したと報告されている。流入とされる遺物の実態がわからないとしても、一定量以上の鍛冶関係遺物が含まれることは間違いなく、７世紀代の竪穴建物の多くが鉄製品の製品の制作に関わった可能性が高い。また、８世紀に入って以降の竪穴建物についてもSI-11からはＬ字形の鉄製品や赤彩の土師器杯が、SI-12でＵ字型を呈する鉄製品や要石とみられる被熱した板石が出土しているほか、製塩土器や赤彩の土師器杯などもみられる。SI-38では鎌と共に出土した鉄製品についてインゴットの可能性があると報告されている。

掘立柱建物はその所属時期を決めがたいが、調査区南端に見られる大型の建物SB-06は、四面に庇か縁が廻り、床束のある大型建物となっている。この建物は、古代の竪穴建物であるSI-06などと切り合いがあり、報告書では同じ柱穴をそれぞれの図に示されるなど十分に整理されているとは言い難い。この建物は、他に主軸方向が一致する掘立柱建物がなく、主軸が同じ溝（SD-02）を始め隣接する遺構がいずれも中世と考えられている。半間幅の縁が廻る床張りの建物とみられ、ひときわ特殊な構造となっていることからも古代の建物ではなさそうである。また、その北側に位置するSB-07・08も周辺から中世の遺物が出土していることから、この周辺には中世の遺構が展開していた可能性が高い。門遺跡南西側には確実な古代の遺構は少なく、古代の中心は遺跡東側にあった可能性が高い。

東側の掘立柱建物はSB-01・04がW-44-N付近の主軸を取り、SB-02・03がW-33-N付近の主軸で揃えていることから、２時期に分かれる可能性が高い。SB-03は総柱の建物で小型の倉庫とみられることから金属器生産に関

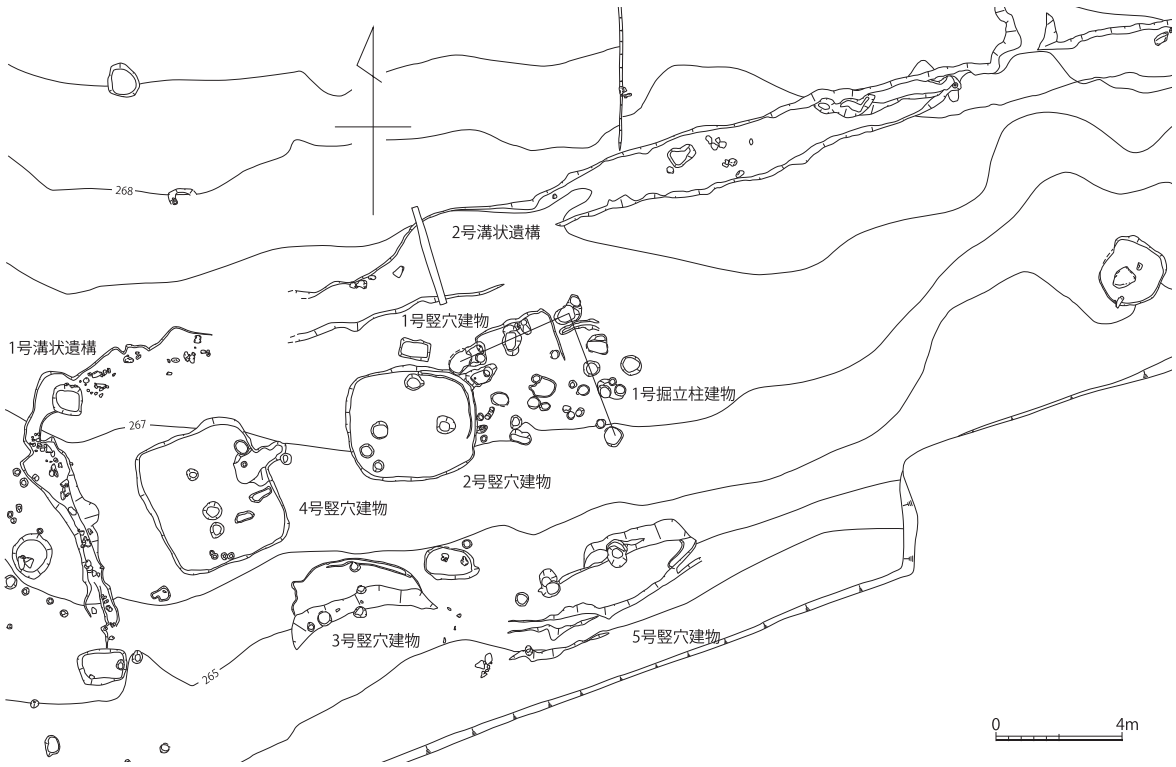
わる施設と考えることもできそうである。なお、これら以外に遺跡北側にSB-05があるが、この建物は柱穴から弥生土器が出土したと報告されている。

古代の竪穴建物からの出土遺物には、SI-19から石見産とみられる須恵器坏、赤彩暗文の土師器杯があるほか、SI-39と呼ばれる遺構からは、転用硯の可能性がある須恵器蓋が出土している。SI-39は遺跡南西側の斜面に面した位置にあるカマドと煙道で、竪穴建物本体は削平され確認できない。転用硯とされる須恵器はこのカマドから出土したとされる。輪状つまみが付くカエリのない蓋で、内面側に線状の傷と摩滅痕が顕著なもの。8世紀前半代（出雲国府跡第2型式）のものであろう。

門遺跡は、鉄製品の製作に関わる集落だった可能性が高く、住居を兼ねた工房や倉庫に相当する建物を備えていたと思われる。7世紀後半～8世紀初頭の竪穴建物から鍛造剥片が検出されており、8世紀初頭までは鉄製品の製作を中心に行っていた集落だったと考えられる。その後の遺構からも鉄製紡錘車などが出土しており、糸などを含む手工業生産に携わった集落だったと想像される。掘立柱建物や転用硯の存在は、手工業生産の管理に関わる施設があったことを示すか。5棟ある古代の掘立柱建物の内、SB-03は総柱の倉庫風の建物。SB-01は2×3間で古代では一般的な建物と言えるが、それ以外の3棟がいずれも梁行き3間の建物であることが注意される。

古代の梁行き3間の建物は出雲国府跡には皆無。松江市福原町の芝原遺跡や出雲市古志町の古志本郷遺跡などで知られている[9]が、官衙よりは居館等で使用されされることが多いように思われる。以上の点から門遺跡を権劄だったと考える根拠は多くはなさそうである。また、門1・2号墳は6世紀代の古墳だった可能性があり、集落とは時間差が大きい。

門遺跡でSB-06以外に古代の掘立柱建物と考えられている遺構はSB-01・02・03・04・08があるが、SB-01・03以外は全て梁行き3間の建物で共通している。SB-01は遺跡中ほどで他の建物から離れて単独で建てられる建物であるが、古代では一般的な2×3間の掘立柱建物。また、SB-03はSB-04の北側に建つ総柱建物で、倉庫風の建物。これらの建物は主軸方向も近いことから、古代の建物群と考えて問題は無いように思われる。 SB-06を中世の建物とすると極端な大型建物はなく、また、梁行き3間建物の割合が高いことが目につく。梁行き3間の建物は、神門郡家と考えられている古志本郷遺跡などで複数棟が知られているが、出雲国府跡では1棟も確認さ



第10図　板屋Ⅲ遺跡の竪穴建物（S＝1:250）

れておらず、芝原遺跡など出雲地方では居館とされる遺跡で多く採用されることが知られている[6]。門遺跡では竪穴建物の可能性が高いSI-39から転用硯が出土しており、役人が竪穴建物に居住した可能性があるが、鍛冶関連遺物の出土などを考えれば、手工業生産に伴う管理施設などを想定するべきではないだろうか。

写真　板屋Ⅲ遺跡SD02出土高杯

板屋Ⅲ遺跡は8世紀後葉に遺物が急増し灯火器や赤彩の土師器、須恵器高杯など官衙の存在をうかがわせるような遺物が集中的に出土している。板屋Ⅲ遺跡は神戸川に面した南向き斜面に立地する遺跡で、妙見神社の旧社地（現在は移転）に隣接する。この神社の場所は地元では『出雲国風土記』飯石郡に記される志都美径の権剗が置かれた場所と言う伝承がある（島根県教委1993）と言う。板屋Ⅲ遺跡にはＬ字形の溝で囲まれた一角（第10図）があり、溝からは硯に転用された須恵器高坏（写真）[10]やタールがべったりと付着した須恵器ⅢＥ、赤彩の土師器杯や製塩土器など官衙から出土するような遺物が多く出土している。また、この溝で囲まれた一角には7世紀前葉の竪穴建物4棟のほか奈良時代の竪穴建物2棟と掘立柱建物がある。7号竪穴建物（報告では7号住居跡と呼ばれる、他の建物跡も同様）からは大谷4期に遡る可能性がある須恵器が出土した。大谷5期とみられる竪穴建物2棟もあり、6世紀末から7世紀前葉には集落が営まれているが、7世紀後半から8世紀初めには目立った遺構がほとんどみられなくなる時期がある。再び遺物が増加するのが8世紀後葉から9世紀前葉で、2条の溝を中心に大量の遺物が出土した。8世紀代の確実な遺構は2号溝と4・5号建物があり、溝出土遺物が多いことから調査区西側にも施設が広がっていた可能性がある。遺物には前出のとおり文書行政に関わる遺物が含まれ官衙関連施設の存在を思わせる。

森遺跡にも倉庫と思われる総柱の建物や大型の掘立柱建物があることから、志都美經の権剗の候補（平野1996）とする説があるが、具体的に官衙の存在を思わせる遺物が豊富に出土すると言った事実はない。地元で伝えられる伝承の根拠はわからないが、妙見神社旧社地に隣接する板屋Ⅲ遺跡は、その出土遺物から候補の一つになり得るが、733年頃の遺構がほぼ見当たらない。

7．まとめにかえて

飯石郡西部地域には門遺跡や森遺跡群を始めとする多くの集落遺跡があり、7世紀後半から8世紀代にかけて多くの竪穴建物が作られる。これらの竪穴建物は森遺跡群の一部など前代から続く伝統的な集落もあるが、多くの遺跡では柱穴のない簡易な構造の建物を交えた手工業生産のための集落だった可能性が高い。こうした集落からは時期によっては鍛冶関連遺物が出土し、8世紀代にも鍛冶のための施設とみられる竪穴建物があるなど、『出雲国風土記』飯石郡の波多小川に記される「鐵有」の実態を想像させる。また、石製・鉄製紡錘車が点々と出土しており糸の生産も行われていたことだろう。また、時には土器の大量廃棄が行われている点は興味深く、組織的な移動を想像させる。

一方、森遺跡群などには前代から続く伝統的な集落も存在したようである。森遺跡群のある沖積地は比丘尼塚古墳と中原古墳に挟まれるこの地域最大の平野で、対岸には志志乃村社があったと推定される。志志乃村社はこの地域では唯一の『出雲国風土記に』記される社であることからもこの地域の伝統的な集落だったことを裏付ける。考古学的には『出雲国風土記』飯石郡に記される志都美径がどこを通ったかは判らないが、神戸川沿いを南に向かうルートは古代以前から主要道だった可能性が高く、そのルート沿いに門1・2号墳、中原古墳、比丘尼

塚古墳が作られ、志志乃村社が祀られている。この地域の拠点的な集落である森遺跡群があり神門郡から飯石郡南部を経て備後方面を結ぶ幹線道の一つが通じていたことであろう。

飯石郡西部地域に集中して見られる竪穴建物には、一般の恒久的な住居以外に手工業生産などに伴う工房などなどが多く含まれている可能性が高まった。この地域では、移動式カマドと土製支脚を使用する出雲地方平野部で一般的な煮炊きが行われておらず、石組作り付けカマドを使用した煮炊きが行われており、出雲地方平野部の生活様式とは異なっている。また、使用される土器類には出雲産須恵器のほか産地不明（石見産か）の須恵器も使用されており、複数の供給先から土器が持ち込まれていた可能性があることからも、政策的な移住を想像させる。出雲平野では6世紀後葉から大規模な水利開発が進められている様子が明らかにされ（池淵2019他）、組織的な移住を伴う可能性も想定されるが、飯石郡西部地域でも近い時期に門1・2号墳や堂ノ原横穴墓が作られるなど開発の手が入り始めた可能性がある。門1・2号墳にみられる特異な石室の出所はわからないが伯耆は大きな候補となるだろう。その後、出雲平野に若干遅れて大規模な集落が作られ始めるが、これらの集落の人々が移動式カマドや土製支脚を用いないと言う点は示唆的で、集落も出雲地方で一般的となる掘立柱建物中心ではない。こうしたことからも出雲平野の再開発を担った人々とは同じグループではなさそうである。飯石郡西部の竪穴建物からは方頭鏃などの武器類も出土しており、こうした遺物も彼らの出自を反映するか。

註

（1）出雲地方における竪穴建物の消滅についてはすでに岩橋氏等による研究（岩橋2005他）がある。なお、仁多郡の垣ノ内遺跡（島根県教委2003a）では大谷5期の須恵器を出土する竪穴建物状の遺構が知られているが、この遺構は柱位置も不明確で、出土遺物は床面よりやや浮いた状態で出土している。このため、報告ではくぼみとして残されていた竪穴建物の再利用だった可能性も記されている。

（2）竪穴建物が古代を通じて残る東日本地域では盛んに研究されており、古代の竪穴建物の構造については荒井1991などを参考にした。荒井氏によれば関東地方は雪が少なく夏の気温が関西に比べて幾分低いことから風通しの悪い竪穴建物でも過ごすことができたとされるが、簡易な構造と言う点においては、居住性以上の利用価値があったとする可能性について問題提起されている（荒井1991・1995）。

（3）本稿で言う飯石郡西部や志々地区は旧志々村を中心とする地域を指し、現在の飯石郡飯南町志々・八神・志津見・角井地区とする。

（4）古墳時代の須恵器について大谷晃二氏が示し（大谷1994）、後に細分が加えられた編年（大谷2001）は「出雲○期」の名称が使用されていた。ところが、岡田裕之氏らによる古代の須恵器編年（岡田他2010）が、新たに大谷晃仁氏の出雲6d期を出雲Ⅰ期として始まる編年を示されたため出雲○期と呼ばれる時期が2種存在することになった。このため、本稿では混乱を防ぐため大谷1994・2001による編年を大谷○期と表記することとした。また、石見地方の須恵器については榊原氏の編年（榊原2010）を、古代の須恵器・土師器食膳具については出雲国府跡での編年（島根県教委2012）を使用したが、それぞれの実年代については林独自の解釈による。なお、各遺構の年代観は報告書に掲載された出土遺物によって検討したもので、各報告書に記された年代とは異なる場合がある。

（5）煙道の分類やその名称については岩橋孝典氏の研究（岩橋2019）による。岩橋氏は土製支脚・移動式カマドを伴わず、作り付けカマドを備える竪穴建物が三瓶山周辺に一定の広がりを持って分布していることから、三瓶山文化圏を提唱する。その中で、長煙道のカマドが石見山間部で多く見られることも指摘している（岩橋2019、川本町教委1992、石見町教委1999、瑞穂町教委1995・1996）。近年大田市川合町の川合神社周辺遺跡でも8世紀代の長煙道のカマドを持つ竪穴建物が多数発見され注目をあつめており、本報告が待たれる。

（6）寺田Ⅰ遺跡の鍛冶工房の復元模型は片屋根とし、採光のためか薄い板壁が屋根の間に大きな隙間を空ける非常に簡素な構造に復元されている。しかし、日常的に風雨が吹き込むような建物で鍛冶が可能だろうか。一方、鉄穴内遺跡では須恵器・土師器の灯火器が複数出土しており、外光の差し込まない施設だったと思われる。飯石郡西部の竪穴建物や各地の鍛冶工房の多くが竪穴構造となっていることからも壁はしっかりと塞がれて風雨が吹き込まず、外光もあまり差し込まないような建物だったと想像されるがいかがだろうか。

寺田Ⅰ遺跡鍛冶工房復元模型　雲南市教育委員会製作

（7）竪穴系横口式石室は出雲地方には他にみられないと言われるが、松江市金崎1号墳の石室を竪穴系横口式石室とみる考えもあった（土生田1981・柳沢1982）。なお、門1・2号墳を7世紀後半とした報告書の年代観については、報告書刊行直

後から検討の余地があるとする指摘があった（角田1999）。

（８）第７図に掲載した門１号墳の図面は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターに収蔵資料の閲覧を申請し、調査当時の実測図をトレースした。また、第８図は林が作成した。

(9) 梁行き３間の掘立柱建物については、岩橋孝典氏の検討（岩橋2005）がある。基本的には居館と考えられる遺跡が多いようにみえるが、官衙とされる遺跡も含まれている。古志本郷遺跡についても後の神門郡家となる豪族居館と考えるべきか。

(10) この須恵器高坏は器面に暗灰色の粒が浮き出す特徴的な胎土で、嶋根郡大井窯跡群のものではない。仁多郡大内谷窯跡産か。

【参考文献】

荒井健治 1991「武蔵国府にみる古代の住環境」『東京考古９』東京考古談話会

荒井健治 1995「国庁周辺に広がる集落遺跡の構造について」『国立歴史民俗博物館研究報告 第63集』国立歴史民俗博物館

飯南町教育委員会 2009『森Ⅱ遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡・森Ⅵ遺跡』飯南町教育委員会 2007『万場Ⅱ遺跡』

池淵俊一 2019「出雲平野における６・７世紀の水利開発とその評価」「国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター

池淵俊一 2020「考古資料からみた出雲平野の水利開発」『前近代島根県域における環境と人間』島根県古代文化センター

茨城県教育文化財団 1983『鹿の子Ｃ遺跡』

岩橋孝典 2005「出雲地方における飛鳥・奈良時代集落について－嶋根郡朝酌郷の村落景観復元模型製作のための一考察－」『古代文化研究 第13号』

岩橋孝典 2019「古墳時代後期の炊爨文化からみた地域相」『国家形成期の首長権と地域社会構造』島根県古代文化センター

石見町教育委員会 1999『大地ノ元遺跡』

内田律雄 1995「『出雲国風土記』「志都見剡」推定地の調査」『古代交通研究 第４号」古代交通研究会

雲南市教育委員会 2007『ゴマホリ遺跡・寺田Ⅰ遺跡』

大上周三 2015「絹糸生産が行われた竪穴建物」『季刊考古学第131号』㈱雄山閣

大谷晃二 1994「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会

大谷晃二 2001「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会

岡田裕之・土器検討グループ 2010「出雲地方における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

小田和利 1994「豊前出土の北陸系土器について」『九州歴史資料館 研究論集 19』九州歴史資料館

角田徳幸 1999「志々地域の後期古墳」『中原遺跡』島根県教育委員会

川本町教育委員会 1992『キタバタケ遺跡発掘調査報告書』

近藤哲雄 1987「東伯耆における横穴式石室の様相」『島根考古学会誌 第４集』島根考古学会

財団法人鳥取県教育文化財団 1985『東宗像遺跡』

榊原博英 2010「石見国の須恵器生産と出雲産須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県古代文化センター

島根県教育委員会 1994『森遺跡・板屋Ⅰ遺跡・森脇山遺跡・阿丹谷辻堂遺跡」

島根県教育委員会 1996『門遺跡』

島根県教育委員会 1998『板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会 1999『中原遺跡』

島根県教育委員会 2000『神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡』島根県教育委員会 2002a『神原Ⅱ遺跡』

島根県教育委員会 2002b『下山遺跡（２）』島根県教育委員会 2002c『小丸遺跡』

島根県教育委員会 2003a『家ノ後Ⅰ遺跡・垣ノ内遺跡』島根県教育委員会 2003b『神原Ⅱ遺跡（３）』

島根県教育委員会 2003c『古志本郷遺跡Ⅴ』

島根県教育委員会 2009『六重城南遺跡・瀧坂遺跡・鉄穴内遺跡』

島根県教育委員会 2012『出雲国府跡－９－（総括編）』

島根県古代文化センター 2014『解説出雲国風土記』

島根県古代文化センター 2022『出雲国風土記－地図・写本編－』

島根県古代文化センター 2023『出雲国風土記－校訂・注釈編－』

下高瑞哉 2020「154 上種東３号墳」『新鳥取県史（資料編）考古２古墳時代』鳥取県立公文書館 県史編さん室

関和彦 2006『出雲国風土記註論』

大栄町教育委員会 1976『上種東古墳群第３号墳発掘調査報告書』

鳥取県教育文化財団調査室 2009『坂長第６遺跡』

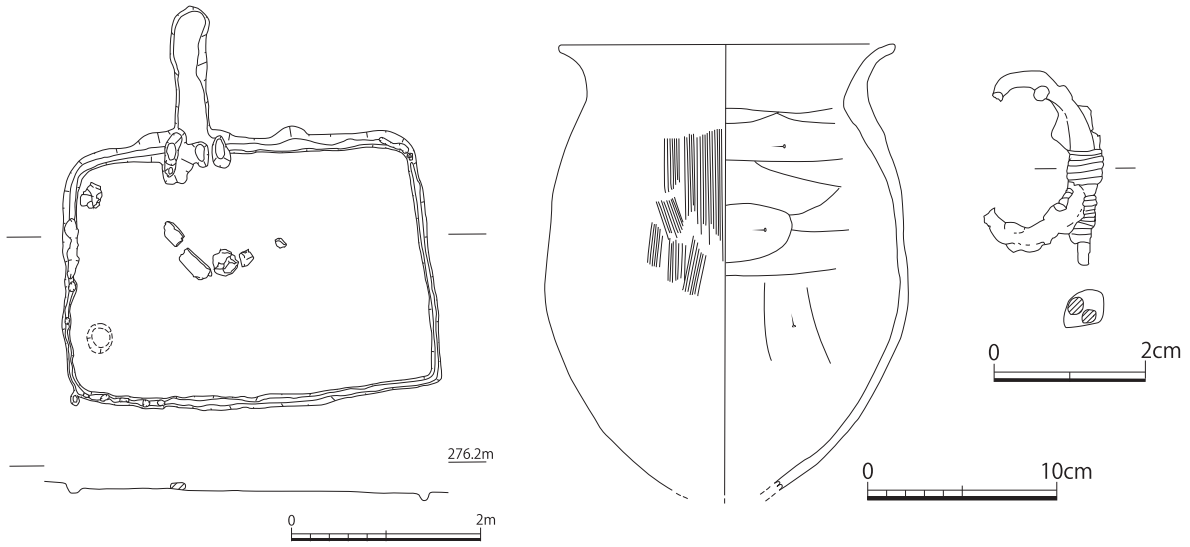
頓原町教育委員会 1994『五明田遺跡』

頓原町教育委員会 1998『埋蔵文化財発掘調査報告書（的場尻遺跡・社日山城跡）』
頓原町教育委員会 2005『神原Ⅲ遺跡・後平遺跡』
中原斉 2020「204 東宗像古墳群」『新鳥取県史（資料編）考古２ 古墳時代』鳥取県立公文書館　県史編さん室
中村太一 2022a「『出雲国風土記』の通道記事とその路線復元」『山陰における古代交通の研究』島根県古代文化センター
中村太一 2022b「『出雲国風土記』の交通路」『出雲国風土記－地図・写本編－』島根県古代文化センター
土生田純之 1981「二基の「竪穴式石室」－横穴式石室の伝播に関連して－」『史泉 第55号』関西大学文学部
林健亮 2020「出雲地方の灯火器出土遺跡」『燈明皿と官衙・集落・寺院』奈良文化財研究所
林健亮 2023「出雲国における集落構造と変遷」『古代集落の構造と変遷３』奈良文化財研究所
平野卓治 1996「『出雲国風土記』の「剡」と門遺跡」『門遺跡』島根県教育委員会
文化庁文化財部記念物課監修 2010『発掘調査の手引き』同成社
松江市教育委員会 1975『出雲国庁跡発掘調査概報』
松江市教育委員会 1989『芝原遺跡』
瑞穂町教育委員会 1995『いにしえの瑞穂 水明カントリークラブ内埋蔵文化財発掘調査報告書』
瑞穂町教育委員会 1996『川ノ免遺跡発掘調査報告書』
柳沢一男 1982「竪穴系横口式石室再考」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集　下巻』森貞次郎博士古稀記念論文集刊行会

付　記

ところで、出雲において政策的な移住と言えば蝦夷の移配が思い出される。『類聚国史』延暦十九年には俘囚を優遇した石川清主が批判された記事がみえるほか、弘仁五年には出雲国で俘囚の反乱があったと言う。延喜式主税上にも出雲国に俘囚料一万三千束が見え、平安期に出雲に蝦夷が移配されていたことがわかる。しかし、実際の遺跡からは蝦夷の痕跡を見いだすことは難しい。本稿で扱った飯石郡西部の集落遺跡もほとんどが７世紀代に始まるもので、蝦夷に関する記事が散見される９世紀ではない[11]。しかし、資料をみていく中では時折違和感のある遺構・遺物があった。

門遺跡の竪穴建物SI-03は門遺跡西端にある小さな竪穴建物。出土遺物は土師器甕片と不明金属製品１点しかないため時期が確定できないが、報告では平安期に下るとされる。この遺構は約11㎡の非常に小さな建物で隅丸長方形を呈し柱穴は確認できない。平安期まで下る竪穴建物は飯石郡西部全体を見ても非常に少なく、門遺跡でも他にない。遺跡西隅に単独で存在し、門遺跡の他の竪穴建物と比べても異質に見える。出土した金属器は棒状のパーツとＣ字形（Ｏ字形か）のパーツを紐で結び留めたものでその用途は判らない。この遺構の特徴的な点としては長煙道のカマドを建物長辺のやや左に寄せて設ける点である。長煙道のカマドは前述のとおり石見地方で



第11図　門遺跡SI-03 実測図（1：80）、SI-03 出土遺物実測図（甕1：3、金属器1：1）

みられるが、壁の中央ではなく角に寄せてカマドを設ける竪穴建物は少ない。東北地方の竪穴建物ではコーナーや、壁の中央より片側に寄せてカマドを設ける場合が多く、長煙道のカマドも多いことが知られている。

中原遺跡の遺物包含層からはタタキ成形による土師器長胴甕が出土している(第12図)。体部外面を平行タタキで成形するもので、肩部より上位をナデ調整する。内面は荒くナデ消され押さえ具痕を残していない。頸部をくの字に折り曲げ口縁部外面に小さく面を持つ。底部の形状は不明。図示した2点は調整や焼成がよく似ているが頸部の長さが異なり別個体。このような須恵器の成形技法による土師器の長胴甕は富山県・新潟県から山形県・秋田県にかけての日本海沿岸に広く分布していることが明らかになっている。中原遺跡で出土した土師器長胴甕は8世紀中頃～9世紀代に用いられた北陸系の長胴甕とみられ、北陸から出羽地域との関連がうかがわれる。この土器の時期は、出雲に蝦夷が移配された時期に近い。

第12図　中原遺跡遺物包含出土土師器甕実測図（1：3）

註

(11)『続日本紀』神亀二年（725）に伊予・筑紫・和泉に俘囚を配した記事があり8世紀第2四半期までさかのぼるが、出雲には8世紀代に蝦夷が移配されたことを示す文献はない。ただし、『類聚国史』延暦十九年の石川清主の記事には「新到俘囚」とあることから延暦十九年以前にも蝦夷が移配されていたとみられるが、それにしても大幅に遡ることはないだろう。8世紀後半代は飯石郡西部の集落が収束に向かう時期であることから飯石郡西部の竪穴建物のほとんどは蝦夷の移配とは無関係と思われる。

【参考文献】

五十嵐祐介 2015「東北地方のカマド」『季刊考古学　第131号』㈱雄山閣
小田和利 1994「豊前出土の北陸系土器について」『九州歴史資料館　研究論集19」九州歴史資料館
㈱岩波書店 1996『続日本紀二』國史大系編集會編 1979『類聚国史』
武廣亮平 1998「出雲国の移配エミシとその反乱」『出雲古代史研究7・8合併号』出雲古代史研究会
武廣亮平 2017「古代のエミシ移配政策とその展開」『専修大学古代東ユーラシア研究センター年報 第3号』専修大学古代東ユーラシア研究センター
虎雄俊哉編 2009『延喜式　中』㈱集英社
吉岡康暢 1991『日本海域の土器・陶磁（古代編）』六興出版

【挿図出典】

第２図は地理院地図 1:25,000「三瓶山東部」を下図に作成した。

本稿に使用した挿図の内下記の図面は以下の報告書に掲載された挿図をスキャンまたはトレースし、一部加工して使用した。

第１図 島根県教育委員会 2002『小丸遺跡』、島根県教育委員会 2000『神原Ⅰ遺跡・神原Ⅱ遺跡』

第３図 飯南町教育委員会 2009『森Ⅱ遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡・森Ⅵ遺跡』

第４図 飯南町教育委員会 2009『森Ⅱ遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡・森Ⅵ遺跡』、島根県教育委員会 1996『門遺跡』

第５図 飯南町教育委員会 2009『森Ⅱ遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡・森Ⅵ遺跡』、島根県教育委員会 2002『下山遺跡（2）』

第７図 島根県教育委員会 1996『門遺跡』

第10図 島根県教育委員会 1998『板屋Ⅲ遺跡』

第11図 島根県教育委員会 1996『門遺跡』